

犯罪被害者等施策講演会(第10回)

日時：平成29年3月28日（火）14時～15時

会場：警察庁総合庁舎7階 大会議室

講師 川名 壮志氏(毎日新聞社記者（謝るなら、いつでもおいで 著者）)



テーマ「犯罪被害者と隣人」

初めまして。毎日新聞記者の川名と申します。今日は、このような場にお招きいただきまして、ありがとうございます。

今日、聞いてくださる方々は、警察庁の方や法務省の方、検察庁、裁判所、更に県庁の知事部局の方々と伺いました。恥ずかしい話ですが、僕は新聞記者なので、その厚かましきから、取材のさなかにはほとんどの方々から「いい加減にしろ」とか、「そんなことしゃべれるか」などと怒られた経験があります。常に怒られる立場にいたものですから、このような場でしゃべることが何だか申し訳ないような気持ちにもなっています。

最初に自己紹介をしますと、僕は2001年に毎日新聞に入社しました。その間、ほぼ警察回りをしていきまして、東京に来てからは、証券取引等監視委員会をやって、東京地裁、最高裁などで裁判を担当しました。今日いらした方々とは、どなたかと担当時代にお付き合いをさせていただいているような気がします。

今、僕は記者16年目なのですがすけれども、これから話す話は、記者の新人時代の話、記者になって4年目のときに僕が体験した話です。今回、僕が話すテーマは、新聞記者が見た殺人事件という面もあるとは思いますが、一方で駆け出しの記者、いわば素人感覚丸出しのままに見た殺人事件でもあります。

新聞記者の体験談というよりは、一般の方々と同じ視点に立った話といたしますか、事件を体験したときに普通の人はどうなことを思うのかというようなことも、多分、重なり合う話になっています。プロ記者の話というより、駆け出しの若手の話、そんなふうに聞いていただければと思います。よろしく願いいたします。

ところで、新聞社には朝日新聞とか、読売新聞とか、毎日新聞、いわゆる「全国紙」と呼ばれる会社があります。全国という言葉を使いますが、これはテレビ局、例えば民放のキー局とは性格が全然違うのです。民放のキー局だと記者が「東京からお伝えします！」とレポートをするのですが、新聞社の「全国」紙というのは何を意味するかというと、「日本全国津々浦々に飛ばされますよ」ということになるわけです。新人記者は東京にいきな

り配属されるわけではなく、すべからく47都道府県ばらばらに飛ばされます。

僕の最初の赴任地が佐世保支局でした。2001年、ちょうど小泉純一郎首相が就任したぐらいの時代ですね。東京の大学を出て、いきなり全く縁もゆかりもない九州に配属されて、本当に自分は一体どうなるのだろうと思っていました。佐世保市は県庁所在地でもありませんので、人口も25万人程度です。一番高いビルは、佐世保市役所。典型的な地方都市ですね。

全国紙は、多分、新聞記者が3,000人近くいると思うのですがけれども、地方支局に行くところも記者の数は7、8人ぐらいなのです。そこで、いわゆる地方版の記事を書くわけですね。僕が最初に赴任した支局は、長崎県にある長崎支局ではなく、衛星支局である佐世保支局だったのですが、そこは人数が更に少ない。人員でいうと、1人が支局長兼デスク。デスクをやりながら支局長をやる上司が1人ですね。それと僕と、もう一人の記者、それから事務の女性。たった4人しかいない支局だったのです。



そんな小所帯ですから、支局もビルじゃないのです。ちょっとこれで見えるかどうか分からないのですが、毎日新聞の佐世保支局です。これを見て分かると思うのですが、1階がくり抜かれた形で駐車場になっているのです。これも来客用の駐車場じゃなくて、支局員のための駐車場です。記者が車で移動するものですから、支局員の車をとめるような駐車場になっているわけですね。そして、2階が支局、職場になります。ワンルームで、机が記者の3人と事務の女性1人分の計4つあって、ソファが1つあって、テレビが1台あれば、もうそれでいっぱいというぐらいのスペースなのです。

支局は3階建てなのですが、3階は支局長の自宅なのです。ここで支局長が寝泊まりをし、朝起きて2階の職場に降りて仕事をし、仕事が終わったら、また3階に上がるという生活をしていたのですね。

僕が佐世保にいたときの支局長は、御手洗恭二さんという方でした。記者20年目のベテランでした。御手洗さんは、3階で中学校3年の息子と、小学校6年生の娘の怜美（さとみ）ちゃんという子と3人で暮らしていたのです。2002年に御手洗さんは佐世保支局に赴任したのですが、その前に奥さんをがんで亡くされていたのですね。新聞記者の仕事は、やっぱり忙しいことは忙しいし、事件があるとなかなか身動きがとれなくなってしまうので、家庭と仕事の両立というのが非常に難しいのです。だけど、佐世保支局の利点は2階が職場で3階が住宅なのです。そういう理由で、仕事と家庭が両立できるため、御手洗さんにとって格好の職場だったのです。御手洗さんは、本来なら、もう少し一線で活躍される方だったと思うのですが、そういう事情もあって佐世保支局に赴任していたので

す。

支局の記者は、支局長が1人いて、僕が4年目で、新人の記者が1人で、計3人でやっているのですが、みなさんは、それで成り立つの？と思うのではないのでしょうか。でも、まあ、成り立つのです。地方版の記事って、見ていただくと分かると思うのですが、ほとんどがタウン誌と変わらないレベルですよ。写真を大きく扱った日々の出来事を書いたり、市のイベントを載せたり、交通事故などの110番のニュースを小さく載せたり……と、大事件を載せるようなスペースではないわけです。

何となく、の感覚なのですが、事件が大きいはじめて、1面、社会面に載るとするのは、東京の話でしょ、あるいは本社のある大阪の話でしょ、という感じでしょうか。長崎の佐世保、例えば熊本でもいいのですが、九州の事件が東京の1面に載ることはないね、という感覚が記者にもありますし、会社にも多分あるのだと思うのです。そういう事情もあって、新人と4年目の記者で佐世保支局を回すことが、何とか成り立っていたのだと思うのです。

ちなみに新聞社は、東京、大阪、北海道など、本社が分社化されていて、九州は、本社が福岡にあって、西部本社というのですが、僕の場合は、多分、入社してから3年間で、西部本社の一面に記事を書いたことがないと思います。

毎日地方版を書き終えて、飲みに行って、みたいな気楽な生活をしていて、当時は独身だったものですから、それでもいいなとも思っていたのです。支局長の御手洗さんは子供を育てていましたので、御手洗さんはビルの3階で御飯を作るのです。地方版は、大体、僕らが記事を出稿するのが午後7時ぐらいで、それが刷り上がってくるのが午後8時過ぎぐらい。僕らが出稿して刷り上がってくるまでに、1時間ぐらい時間が空くのです。その間に御手洗さんは夕飯を子供たちに作って食べさせていて、僕も支局に残っていたので、一緒に3階に上がって御飯を食べさせてもらっていたというような感じになっていて、すごく牧歌的なのですが、野菜炒めと一緒に食べたり、ゆで卵を食べたりとかしていたのです。まあ新聞記者なので、御飯を食べたりすると、どうしてもお酒が欲しくなるわけです。刷り上がってくる前に、ちょっと軽く一杯、九州なので芋焼酎を飲んで、その目の前で怜美ちゃんと怜美ちゃんのお兄さんと4人でガヤガヤしながら御飯を食べることが、結構日常の風景だったのです。

だから、支局は職場だったのですが、そこにはいつも怜美ちゃんがいたのです。当時、小学校6年生でした。学校から帰ってくると右手に階段があるのですが、3階の自宅に上がらないのです。ランドセルを背負ったまま駆け上がってきて、ドアを開けるのが2階の職場なのです。なぜかという、そこに父親である御手洗さんが仕事でいるからです。「ただいま」と言って、そのまま支局に入ってきて、御手洗さんや僕らが「おかえり」と笑うようなやり取りがありました。

さっき言った職場のテレビというのは、本当はNHKを見ていなければいけないのです。事件が発生したりすると、NHKが速報を流すので、NHKを常につけておくというのが

新聞社の常識なのですが、そこに怜美ちゃんが来ると、民放のアニメを見ていたりとかして、今、思うと、大丈夫かな、と思うのですけれども、それがもう普通の感じだったのです。

ソファがあって、怜美ちゃんがソファに寝転がって、本を読んだりもして、家庭と職場がもう一体になっているような雰囲気だったのですね。

そういう牧歌的な支局だったので、記事も本当にユルいと言われればユルいかもしれないのですけれども、ほのぼのとしていたのです。ある日の記事は、こんな記事でした。「アジサイ咲いた」という大きな見出しをつけた記事。雨の中でアジサイが咲いていて、その前に長靴を履いた2人の女の子が傘を差している。タウン誌みたいな写真なのですけれども、僕が写真を撮ってきて、そこに短い記事を添えて、地方版の記事にしました。そしたら、珍しく御手洗さんが、「いい写真撮ったな」なんて褒めてくれて。新聞記者になった以上、「ジャーナリスト」と言われる格好いい仕事をしてみたいなと思って入社したのですが、毎日こんな生活をしていると、ジャーナリストじゃなくても、こんな生活も悪くないと思える日常だったのです。牧歌的だったなと思います。

その「アジサイ咲いた」という記事を書いた翌日のことでした。2004年の6月1日、1本の電話が多くの人々の人生を変えました。正午ぐらいでしょうか、昼過ぎのことでした。

1年生で警察担当をしている後輩から電話が掛かってきたのです。「大久保小学校で子供がけがをしたみたいです。救急車で運ばれたそうです」1年生の男の子の声が、かなり上ずっていました。新人だし、本当かな？と思ったのですけれども、彼は佐世保警察署で副署長に確認したと言ったのですね。御存じのように副署長は広報担当ですので、うそをつくわけがない。僕は支局から少し離れたところで取材をしていたのですけれども、「あ、まずい」と思って、慌てて車を走らせて支局に戻ったのです。

戻っている途中に、また、その1年生から電話が掛かってきました。それで、「女の子が死にました」と言ってきたのです。直感的に、「ああ、ニュースになっちゃう」と思いました。早く帰って取材しないと、と車を走らせて支局に駆け上がったのです。ところが、その支局にデスクである御手洗さんがいないのですね。

一般にみなさんも「デスク」ってよく耳にされると思うのですけれども、デスクはなぜデスクと言うかという、外に出ずに机にへばりついているからデスクなのだ、というふうに言われるぐらい支局から出て行かないものなのです。そのデスクが、こんなにばたばたしているときに支局にいない。だから、何だかすごく落ち着かないわけです。むしろ何やっているんだよ！というぐらい、ちょっとイラつきもするわけです。

それで支局に戻ってきて、しばらくしたら、御手洗さんから、支局に電話が掛かってきました。

「怜美が死んだ」。

御手洗さんは、たった一言の言葉を口にしました。その言葉は、本当に抑揚もなく、淡々としていて……。その意味が僕には理解できないぐらいのトーンという言葉だったのです。

僕は、何を言っているのか分からなかったものですから、ずっと無言でいたのですけれども、そうしたらもう一度、御手洗さんが「怜美が死んだ」と言って、電話を切ったのです。

ぼう然としていたところ、それから5分後ぐらいのことでした。御手洗さんが支局に戻ってきて、「多分、これは事件だ。会社に連絡して」と僕に言ったのです。そう言い残すと、とぼとぼと歩いて、佐世保警察署に行ってしまったのです。たった一言それだけ言って、そのまま背中を向けて出て行ってしまった御手洗さん。その背中というのは、今でも僕はちょっと忘れられないです。

御手洗さんに次に会ったのは、テレビの中でした。テレビ画面の中で御手洗さんは、NHKの午後9時のニュースで記者会見に出ていました。そこにいた御手洗さんというのは、スーツを着ていて、ネクタイを締めていた御手洗さんでした。ふだん、支局ではスウェットとか、夏はランニングシャツを着ていたんです。昔ながらの記者なので「俺は入社試験でもネクタイをしていなかったんだ」と自慢して、「俺は、そういうちょっと反権力」みたいなノリのある人だったのに、そのテレビ画面の中で御手洗さんはきちんとワイシャツを着て、ネクタイを締めて、記者会見に臨んでいました。テレビで記者会見をした後、御手洗さんはもう職場には戻ってきませんでした。

少し時間を戻します。僕は御手洗さんから、「多分、事件だから会社に連絡して」と言われて、慌てて本社に電話したのです。さっきも申し上げましたが、九州の場合の本社は福岡総局というところなのですけれども、そこに電話をして、「御手洗さんの娘が亡くなりました。社会部長につないでください」と何度も電話口で言うのですけれども、全然本社の記者さんは電話をつないでくれないのです。

僕は記者4年目ぐらいだったので、本社の記者になめられているんじゃないかと、4年目が言っている話なので信用されていないのじゃないかと思って、腹が立ってしょうがなかったのです。

そのうち本社の社会部のデスクが出てきて、「その話って、本当なの？」としつこく聞くのです。「いや、間違いないですよ、だって、御手洗さん本人から聞きましたから」と言い返したら、その社会部のデスクが、「じゃあ、原稿を吹き込んで」と言ったのですね。「えっ!？」と思いました。支局の壁にかかっている時計の針を見たら、午後1時半過ぎでした。夕刊の締め切りぎりぎりだったのです。“勸進帳”というのですけれども、電話口で原稿を吹き込めって言われたのですね。

この人は鬼だと思いました。足が震えてしまいましたし、怒りも沸き立ってしまっ…でも、初めてそのとき、「自分は新聞記者なのだ」と思いました。そのときに書いた記事が、この「小6 女兒、切られ死亡」という記事です。【毎日新聞「小6 女兒、切られ死

亡」参照(拡大はこちら)】自分で何をどうしゃべったのか、全く記憶がないのですが、この記事を書いたのですね。たった20行の記事なのですけども、夕刊1面に載りました。

たしか海外にも配信されたと思います。



加害者の女の子というのは、怜美ちゃんの同級生の女の子でした。まだ11歳でした。1997年の神戸連続児童殺傷事件の酒鬼薔薇少年が14歳でしたから、それよりも3歳も年下で、しかも女の子だったのです。給食の時間に、空き教室へと怜美ちゃんを呼び出して、カッターで首を切りつけていたのです。つまり、殺意を持っていたはずみではないということですよ。

それで、当然ながらすぐに新聞記者の取材が始まりました。その当日から、毎日新聞でも応援の記者が20人ぐらい入ってきて、毎日、朝刊、夕刊で記事を書く感じでした。今見ている「小6、同級生切り死なす」という記事は、6月1日の翌日、2日付の朝刊です。【毎日新聞「小6、同級生切り死なす」参照(拡大はこちら)】



東京紙面でも1面頭に記事がいきなり掲載されてしまうほどの事件だったわけです。何かちょっと信じられないなと思ったのですが、そういうことが田舎の支局でも起こり得るのですね。

僕は、警察担当でもありましたので、警察幹部の夜回り、朝駆けもしましたし、弁護士や関係者回りもしました。毎朝、毎晩、一課を含めた警察幹部の自宅を回りましたし、触法少年の事件でしたけれども、検察も回りました。当時は、裁判所も回って、何かネタが取れないかと一生懸命回りました。

それで、恐ろしいのですが、うちの会社として、「これは身内が亡くなった事件だから、絶対に抜かれたらいかんで」みたいなことも上司に言われるわけです。「えー」と思いながら、やっぱり必死に回っていました。つまり、僕は記事を書く側に回ってしまったのです。被害者側ではなくて。

この6月1日の事件の前は、御手洗さんとは上司と部下の関係でもありましたし、怜美ちゃんとも夕食を一緒に囲むような間柄だったのに、この事件を境に、御手洗さんと僕は、「被害者」という取材対象者と、取材する側という立場になってしまったのです。自分でも人でなしに成り下がったなと思いました。

そのとき、何で新聞記事が書けたのかなと、今になって思うのです。「お前が書かないで誰が書くんだ」と上司に言われたのはそのとおりでしたし、信頼している上司から、「いい加減な報道で怜美ちゃんを二度殺すわけにはいかん」と言われたということもありました。ああ、そのとおりかもしれないと、そのときは思いました。

でも、今、考えると、ちょっとそれって格好良過ぎるのですよね。当時、自分のよく知っている女の子が殺されてしまったわけです。僕は、記者4年目で、20代後半に差ししかか

った頃でした。多分無意識に、御手洗さんと一緒にこの悲しみに引きずり込まれたくないな、と思ってしまったのです。このまま、この感情に引きずり込まれたら、僕の人生、終わってしまうかもしれないな、復帰できない気がする……、心の底の方でってしまったのです。

だから、この職場から逃れたら自分は駄目になってしまうかもしれないなという感じがして、逆に僕は仕事にしがみついてしまったのです。ひどいことをしたなとも思います。

加害者の少女は、少年法に基づいて少年審判にかけられました。でも、触法少年なので刑罰は科されないのですね。児童自立支援施設に行くのは、もう決まりきった話でもありましたし、司法手続としては、それで終わりのわけですね。

審判が終わって、決定通知の要旨が公開されました。事件について、加害少女の動機に触れていて、それは、社会性や他者への共感が希薄で怒りを適切に処理できないという特性があった女の子が、インターネットや交換ノートのいさかいで怒って殺意を抱いたというものでした。それが、決定通知の大きな中身でした。身もふたもないですね。子供のけんかのレベルを超えていない。でも、手続的には、もう児童自立支援施設に行くのは決まりきった話ですし、終了であるのは間違いないのです。

でも、それだけでは、やっぱりわだかまりが残るのです、自分の中に。もやもやするのです。でも、新聞記事はどこ新聞でも一緒だと思うのですが、司法手続が終わったら、書けることなんてないのですね。新しい情報が入るわけでもないですし。それに世の中では他にも事件がいっぱい起きていますから、社会の関心はほかの方へと移っていくわけです。たくさんいた応援の記者も佐世保支局からいなくなってしまって、御手洗さんもいなくなってしまって、僕はぼつんと、その1年生の記者と2人で残されて、ちょっとどうしていいかわからなくなってしまったのだと思います。

何か、このまま終わるのは嫌だなと思って、何をしたのかというと、加害者である女の子の父親の家に行ったのです。いいかどうかは別として、少年事件で必ずメディアが問うのは、親はどういう親だったのか、ということです。親は何をしていたのかとか、親の虐待はなかったのか、ということをお必ず取材するのです。

父親の家は、加害少女の家でもあるのですけれども、山奥の一軒家だったのです。最初はマスコミが殺到していたのですが、もう事件が終わってしまうと、誰も来ないのですね。それで、行って見たのです。暗い山道を車で15分ぐらい走って着く場所で、街灯なんて何もない。でも、会いに行ったら、玄関の扉が開いたのです。こっちはちょっとびっくりしてしまって、逆に聞くことなくオドオドしてしまったりして。だから何を話したかも覚えていないぐらいで帰ってしまったのですけれども、それでも、ああ、この人は会えるのだなと思ったので、会いに行き続けたのですね。もう、会社にも内緒で、夜回りも終わった後に行ったので、大体、午後10時ぐらいに、3日に1回ぐらい行っていたのです。

不思議なことに、最初は、父親も玄関先で話をしていたのですけれども、だんだん打ち

解けてきて、最終的には、居間まで通してくれて話をするようになったのです。加害少女の家の方も、事件が起きてから一家離散してしまっていて、その自宅には父親しかいませんでした。父親も話し相手が、欲しかったのかもしれませんが。世間話とか、暮らしぶりとかを話していると、次第に向こうの方が僕の存在を待つようになってしまって、相手は怜美ちゃんを殺した女の子の親なわけなのに、最後はかえって僕の方が混乱してしまいました。

一方で、父親の方は、話を通じて僕と御手洗さんのつながりを感じて、どんどん距離を詰めてくるわけです。

「川名さんは私のことをどう思っているのですか」なんてことも聞かれたりしました。でも、答えられないですよ。僕は、被害者でもないですし、遺族でもないわけですから。あるいは、「御手洗さんにどう謝ればいいですか」というようなことも、僕に聞いてくるのです。でも、それも答えられないですよ。答えることは、多分、御手洗さんに対する背信行為だと僕は思っていたので、それにも答えられないわけです。何か、微妙な緊張感がありながらも、次第に相手が打ち解けていく不思議な関係ができてしまって、父親の方も問わず語りに事件の話をするようになってきたのですね。

事件当時は、「加害少女の孤立」ということが、一つ大きなテーマとして取り上げられていました。それで、加害少女が孤立した一つの理由として、少女が大好きだったバスケットボール部を退部したという話があったのです。放課後、バスケットボールを友達と一緒に、地元のバスケットボールクラブに入ってやっていたのですけれども、小5の冬かな、加害少女はクラブを辞めているのです。それから、どんどん加害者の女の子はインターネットに没頭したりとか、オカルトサイトをのぞくようになってたりとかというふうになっていると。そういう報道がありました。

孤立の一つのきっかけとして、そのバスケットボール部の退部があったというふうにメディアは捉えていたのです。僕も、それがすごく気になっていて、どうなのだと思っていたのです。その時点での報道、あるいは教育委員会の判断としては、親の言いつけでバスケットボール部を退部させられていたとされていたのです。「進学が目的」とか、「勉強しなければいけないから」というような理由で、大好きだったバスケットボール部を父親が、辞めさせたというような捉えられ方がされていたのです。

それはどうなのかな、とずっと気になっていたのですが、父親いわく、それはちょっと違うというのです。少女の家は、先ほども言いましたが、すごく山奥なのです。通っていた小学校は、190人ぐらいの小さな小学校なのですけれども、3、4人だけバス通学だったのです。山の方に家がある子がバス通学で、そのうちの1人が、この女の子だったのです。その山の家に帰る道のりというのが、両脇を高い木で覆われていて、すごく暗いのです。片側1車線もない道で、通学に使う民間のバスも、昼でもライトをつけて走るような道だったのです。

加害少女のやっていたバスケットボールは放課後に活動があったのですけれども、バス

の最終時刻が午後6時だったのです。ぎりぎりまでバスケットボールの練習をして、最終のバスに乗り遅れると、その道を少女は歩いて帰らなければいけない。夏ならまだしも、冬で暗い道で年頃の女の子が、歩けば多分、2時間、3時間かかるような道のりだと思うのですけれども、帰らなければいけない。父親として、娘を1人で帰すわけにはいかなかったと。それでバスケットボールを辞めさせたというのが言い分なのです。

一方で、父親は、なぜ娘が事件を起こしたか分からない、とも言っていました。事件の前日の夜に、父親は加害少女に話し掛けているのです。父親は娘が読みたかった本を、アマゾン・ドット・コムで注文したらしいのですね。「〇〇ちゃん、アマゾン・ドット・コムで本を注文したよ」と伝えたらしいのです。その本というのは、ノンフィクションで、交通事故で大やけどを負った若い女性が立ち直る話という、わりと感動もののノンフィクションだったみたいで、それを加害少女が読みたいと言っていて注文したと。「注文したよ」と伝えたら、屈託なく笑ったというのです。それが最後に見た加害少女の顔だったと父親は言うのです。

でも、一方で、その夜に、加害少女はインターネットで怜美ちゃんの殺害方法を一生懸命検索しているのです。首を絞めたりとか、千枚通しで刺したりとか、いろいろな殺害方法を検索して探しているのです。何だか整理ができない話ですよ。

加害者の父親は、実は障害を抱えていました。少女が生まれた直後に脳梗塞になっていて、半身不随になったものですから、母親がパートに出て、父親が自宅で子供を育てるといった環境でした。父親は、「娘を見る時間が足りなかったかもしれない」なんて話もするわけです。

父親に会って、僕は何を言いたかったか、あるいは何をしたかったか、自分でも整理ができないのですけれども、少なくとも父親が最低なやつだったら、自分の振り上げた拳を打ち下ろすことができたと思うのです。でも、振り上げた拳の落としどころが見つからない感じになってしまったのです。

加害者の父親さえ取材できたのに、この人には取材できないなと思っていた存在が、1人だけいました。それが怜美ちゃんのお兄さんでした。当時14歳で、中学3年生でした。年齢的にも3歳違いでしたし、お母さんが亡くなっていて、父親は多忙な新聞記者だったので、兄妹の仲はすごく良かったのです。だからこそ、誰もが腫れ物に触るようで、誰も助けられなかったのです。

事件直後に、ある評論家が、新聞記者だったら、すぐ聞くべきだ、と言っていたのですけれども、そのとき僕が思ったのは、いや、聞けないし、聞きたくもないよ、ということでした。そんなことできるわけじゃないか、とすごくその評論家に反発したのですけれども、一方で、何というのでしょうか、何だか聞かなければいけないのかもしれないな、とも思ったのです。

でも、僕、子供の取材ってすごく苦手なのです。なぜというと、踏み込み方が分からな

いのです。先ほど、今日、来られたいろいろな方々に怒られましたという話をしましたがけれども、こういう言い方をすると、また、更に怒られるかもしれないですが……、皆さんには怒られてもいいのですよね。怒られたって、怒られるだけじゃないかという開き直りができますし、怒られたとしても、まあまあとか、ちょっと僕が間違えましたとか、混ぜっ返したりだとか、かわしたり、こなしたりすることが、多分、大人同士だとできるのですよね。

でも、子供の場合って、そういう、にわか仕込みなことができないと僕は感じていて、しかも、このお兄ちゃんの場合は、僕がもし彼を傷つけたら、その責任を自分には取れないなとも思ったのです。責任が取れる範囲を超えてしまっているなとも思っていて、とてもじゃないけど聞けないなと思っていたのです。

ただ、この事件を境に、僕は犯罪被害者の方々にお会いすることが増えたのですけれども、兄妹の話というのは、すごく大きなテーマでもありますし、遺族が家庭内で触れたくない話題であったりもするのです。誰かが話を聞いてあげなければいけないのかな、とも思っていたのです。遺族の場合、親が子供に話を聞かなくてことはできないのですよね。子供も、やっぱりそれは同じように感じていて、誰もその子供に対してタッチできていないのですよね、聞いていると。

それで、お兄さんは当時14歳でしたが、このお兄さんが20歳になったら話を聞こうと決めたのです。20歳になったら彼も自分の言葉に責任が持てるだろうと。そのときまで待つ話を聞こうと思ったのです。それが、事件から6年後のことでした。お兄さんに、もしよかったら話を聞いてもいいかな？と尋ねたところ、驚いたことに「僕に話を聞いてもいいって聞いたのは、川名さんが初めてです」と言われたのですね。「誰も僕の声になんて耳を傾けてくれませんでしたから」と言われて、えーっ！と思って。

こっちは腫れ物みたいに絶対に触れてはいけないのだと思っていた存在が、逆に、誰も俺に触れてくれないと思っていた。このギャップにちょっと驚いてしまって。当時、僕は福岡にいて、お兄さんは長崎にいたのですけれども、長崎まで会いに行って話をしたら、もうダムが決壊したような感じで、話が止まらないのです。

実は、このお兄さんは事件の真相をよく知っていて、先ほど少し決定通知の話もしましたがけれども、加害少女と怜美ちゃんのインターネットのトラブルのことも、交換日記のいさかいも知っていたのです。なぜなら、事件前に怜美ちゃんに相談されていたのです。「どうしたらいい？」と。でも、子供だから、相談に対して解決策を見い出せなかったのです。でも、その「どうしたらいい？」を、お父さんである御手洗さんには告げられなかったのですね。子供同士のルールというのがあって、親にチクるといのはルール違反と思ったみたいなのです。

一方で、そのお兄さんは加害少女のことも知っていたのです。加害少女は、支局3階の自宅に遊びに来ていたりもしたのです。お兄さんもいたので、一緒にテレビゲームで遊んだことがあったと。事件が起きたときに、「ああ、あの子かと思った」と言うのですね。な

のに、「誰にも話せなかった」と言うのです。

皆さんぐらいの方だと、ちょっと記憶にあるのかなと思いますけれども、事件当時、デスクである御手洗さんは会見に臨んだりとか、手記を書いたりとか、対外的に見れば立派なことをしていたと思うのです。だけど、「家庭に戻ったら全然違った」とお兄さんは言うのですね。2人のときは目の焦点が合っていなかったと。「それを見て、おやじ、このまま死んじゃうんじゃないかな、後追いしちゃうんじゃないかなと思った」と言うのです。

そう思ったときに、彼はどうしたかという、「自分が泣いたら駄目だ」と心に決めてしまうのですね。「自分まで迷惑を掛けちゃったらいけない」と。子供って、大人が思っている以上に周りをよく見ていますし、大人が信じられない速度で成長してしまうということがあるのかなと思いました。それからのお兄さんは、感情にふたをしてしまったのです。でも、そんなのいいわけがないのですよね。

中学を卒業して、御手洗さんが佐世保支局から福岡に異動になったのと合わせて、お兄さんは福岡の高校に入学するのですが、父親である御手洗さんが職場を変えて仕事に復帰して、日常を取り戻していくと、逆に子供の限界があらわになるということが起きたのです。「バケツの水が全部ひっくり返った」とお兄さんはそのことを表現するのですけれども、福岡の学校に行ってから教室に行けなくなり、保健室通いが続きます。それすらも親を心配させるということで打ち明けられないのですね。気付いたら、もう半年たっていて、もう駄目だということで退学をします。それからは、父親の御手洗さんと一緒に臨床心理士や精神科医にも回るのです。

犯罪被害者って、同時にみんな同じタイミングで苦しむと思いがちなのですが、でも、違うことがあり得るのです。時差がやっぱりあるのです。親であるとき、子供であるとき、立場が違うと苦しみ方というのも違いますし、その苦しみを家族で共有するというのを、なかなかできないのだと思います。事件が起きると、家族は結束すると思いがちですが、逆に崩壊する家族というのも、僕が見ている中でも多くて、理不尽だなと思うのですが、それが現実なのだろうなと思います。

お兄さんは、それから臨床心理士回りとかをするのですけれども、お兄さんの言い方というと、「結果的には役に立ちませんでした。頭の中で巡っていることを言語化できなかった」ということになります。カウンセリングに行くと、話してくださいというのが基本なのですが、話したいことがあるけれども、それを言葉にできないという状況だったようなのです。

そういうふうに考えると、臨床心理士と違って、新聞記者というのは踏み込むのが商売なのです。話しても大丈夫だと分かると、いろいろと踏み込んで聞いてしまうのです。それが、このお兄さんの場合はよかったみたいで、「話したことについて、実際にこの部分はどうなのと突っ込んでくれる人がいることによって、自分が何を考えているかが分かった。自分が考えていることを言葉としてアウトプットすることがすごく大事だった」とい

うようなことを言うのですね。ああ、そういうことがあるのだなと思ったのですけれども。

お酒を飲みながらも話をしたので、多分100時間以上いろいろな話を聞いていると思うのですが、その中で、加害少女についてどう思うということを僕が聞いたのです。そうしたら、そのお兄さんは、「普通に生きてほしい」と言ったのです。「ずっと苦しんで、結局そういうふうにした」と言うのです。「ええ？」と思って、そんなことがあり得るのかなというふうにも思ったりもしたのですけれども、何度も同じことを確かめたのですが、お兄さんは、やはりそう言うのです。

この話を僕は本にしたのですけれども、その本で、お兄さんがどういうふうに語っているかという、ちょっと読みますが、「彼女には、普通に生きてほしい。波乱万丈なものは僕自身がいないというものもあるし、1回の謝罪があれば、あとは、それなりの人生を歩んでほしいです。こっちはこっちで普通に生きていくつもりだから」「僕は相手のこともトラブルの内容も、地味にいろいろ知っちゃってるから、それ以外にあまり言葉が思い浮かばない。ほかにあまり望むものがないから。だって、怒ってもどうしようもないと言ったらおかしいけど、取り戻せるものは何もないですから」「結局、僕、あの子に同じ社会で生きていてほしいと思っていますから。僕がいるところできちんと生きろ、と」。そんな言い方をしているのです。そして、「謝るなら、いつでもおいでと思っています」とも言うのです。人の心の強さ、のびやかさを思い知らされました。

ただ、大体、一般の方々対象の講演では、ここで終わるのですけれども、お兄さんの言葉というのが実は更に続きがあるのですね。「もし彼女が謝罪に来るのなら、会うのが怖いという感情は僕にはない。きちんと会うべきだと思う。僕も相手も、対等な関係で」と言っているのです。更に「自分のしたことを全く理解できていない当時に謝られても、どう思えばいいか分からないけれど、自分がやったことが分かっているはずの今、きちんと謝ってほしい。その方が、スッキリする。逆に、施設から出た後に、合わせられる状態にないというのなら、それは国が再教育に失敗したんだってぐらいに僕は思っています」と続くのです。

優しい言葉であると同時に、非常に強い意志を感じる言葉でもあるなと僕は感じています。

今回の講演のテーマは「犯罪被害者と隣人」ですが、やっぱり家族同士で話せないということがあると思うのですよね。つらすぎるのです。お互い、生傷で生傷に触れ合うような感じになるので、やっぱり家族間で事件のことは話すことができないのです。だから、赤の他人にしか話せない、あるいは他人でなら話せるということが、多分、あるのだと思います。

御手洗さんが、事件から3年後にコラムを書いています。「千の風になって」という、あの「私のお墓の前で 泣かないでください そこに私はいません 眠ってなんかいません 千の風に 千の風になって あの大きな空を吹きわたっています」という有名な歌をテ

一マにしたコラムです。この歌には続きがあって、「秋には光になって 畑にふりそそぐ
冬はダイヤのように きらめく雪になる 朝は鳥になって あなたを目覚めさせる」と続
くのですね。

そのコラムをちょっと読んでみます。

「受け入れがたい現実には直面した時、人は心をどう保つのだろうか。3年前の今日、娘
を失った。多くの励ましや慰めの中に、死者からのメッセージに曲をつけたCDがあった。
死んだ人が残された人に、自分は死んでなんかいない、姿を変えて周りにいる、と伝えて
いた。何を言っているのだと反発した。が、いつしか繰り返し聞く自分がいた。ある時、
娘の写真を見ていた友人が言った。「いなくなって悲しいという気持ちは消せないだろう
けれど、幸せな思い出をたくさんもらったって思えないかな」。ふざけるなどそのときは思
った。でも、何か心が引っかかった。ある朝、ベランダに見慣れない小鳥が来た。はっ
とした。あのCD「千の風になって」の、鳥になって残した人を目覚めさせる、という内
容がよみがえった。姿を変えて来てくれたのか。動悸が激しくなるのが分かった。時は何
も解決してくれない。ただ友人の言葉を振り返り、CDを聞き返すたびに感じている。少
しずつでしか、心は現実には折り合いをつけられないと」

この友人というのは、会社の後輩です。怜美ちゃんのことよく知っていて、いろいろ
と事件後も身の回りのお世話をしていた人でした。

犯罪被害者の方と付き合っていると、隣人の存在がすごく大きいと思うのです。家族で
言えないことを、隣人だからこそ言えるということがあり得るのだと思います。隣人でし
か言えないことというのは、隣人だから言えることということでもあると思うのです。

今日は、行政の方もいるということなので、隣人という存在がいるのと同時に犯罪被害
者にとって大事なものは、プロがいることでもあると思うのです。プロがきちんと仕事をす
ることというのが、遺族を楽にさせることにもつながるのだと思います。

加害少女の父親は、実は、月に1回、遺族に手紙を書いていたのです。なぜそれができ
たかという、そこに付添人の弁護士がいまして、お前が逃げたら加害少女は一生苦しい
で一生許されないよと弁護士に言われ続けたのです。その支えがあったからこそ、月に1
回の手紙を書き、それによって御手洗さんと辛うじて細い糸をつなげることができた。

一方で、警察の方々にいうと、事件当時、御手洗さんの子供の送り迎えをずっとやって
いたのです。登下校中に、こう言うのも何ですが、メディアに取材されないようにと、き
ちんとガードをしてくれたのです。

被害者であっても、子供は自立していかなければいけないですし、大人は職場復帰、家
庭復帰をしていかなければいけないわけです。日常に戻らなければいけない。僕みたいな
立場で偉そうなことをいうのも、何か違うかなとも思うのですけれども、そのためにどう
いうことができるのかということ、プロがプロとして想像力を働かせて、その仕事をき
ちんとすることというのが大事なのかなと思います。別に、すぐに役に立たなかったとし
ても、そこで仕事をしっかりするということが、後々につながってくるんじゃないかなと

いうふうに思ったりもして、今日、皆さんのところに講演の講師として足を運ばせていただきました。

御清聴ありがとうございました。(拍手)

— 了 —